



約1年ぶりに連載再開です。

10月に環境省が平成27年度の犬猫引き取り及び負傷動物の収容状況を発表したⁱ。統計によれば、27年度の猫の殺処分数は1年間で67,091頭。前年度の79,745頭と比較すれば12,654頭も減少した。だが、未だに1日約183頭、15分に約2頭のペースで人為的に猫を殺している。

猫たちはどう思っているのだろうか。猫にとっての幸せとは何だろうか。といっても猫は、今この瞬間を全力で生きているのであって、不満を抱いているわけではないだろう。猫の現状に不満を抱いているのは私だ。私から見てかわいそうに見える状態の猫を極力減らしたいと思う。そしてこの排除的なシステムは人間にとっても不利益であると思う。

「ノラ猫」は野性動物ではないため、干渉せずに生息域を守り、「共存」する対象ではない。かといって、家族の一員として人と「共生」しているペットとしての猫でもない。「ノラ猫」という「共生」と「共存」の狭間の存在に私たちはどう向き合っていくべきなのだろうか。当初は、地域猫活動のルポを書く予定だったが、なぜ排除ではなく共生や共存的なシステムが良いと思うのか、をテーマに今回は書いてみたいと思う。

■ 共生と共存

「共生と共存の違いを説明してください」と言われたら、どう答えるだろうか。「共に生きる」と書いて共生、「共に存(あ)る」と書いて共存、共に生きていくことが共生だとすれば、家族は共生で、近所の人は共存だろうか。私は、影響し合い一緒に生きている様が「共生」で、つかず離れずの距離を保ちながら同じ場所に存在している様が「共存」かなと考えている。

対人援助学マガジンの編集長である団先生の授業で、「結婚は両者のそれぞれの文化を統合して、新しい家族の文化を作っていくこと」であり、例えば、朝食のバターを端から切っ

で使っていくのか、真ん中をすくうように使っていくのか、それぞれの育った家庭の方法が違ったなら、どちらの文化を採用するかその都度決めていき、新しい文化を作っていくことが必要である。という話だった（と思う）。それはきっと「共生」のプロセスだと思う。もし、これを「共存」的に解決するとすれば、どちらかの食べ方にするのではなく、バターを2つ買って、それぞれがそれぞれの食べ方をする。といった解決方法になるだろう。賞味期限と冷蔵庫のスペース的にはもったいない気もするが、それぞれの文化を尊重しているともいえる。

共生と共存は、きれいに分類できるものではなく、階層的で複層的で、共生の中にも共存と共生があり、共存の中にも共生と共存もある、、、と考えていると頭がこんがらがってくる。でもなぜか考えずにはいられない。友人や会社などの人間関係で、距離感をうまく取れずに失敗した経験は誰にでもあるんじゃないだろうか。友人に嫌われない距離感、自分がしんどくならない距離感はどうくらい？共生寄り？共存寄り？共生と共存の狭間で、どう生きていくか悩むのは、もう人間の永遠のテーマなんじゃないかと思っている。

猫を簡単に排除するコミュニティは人だって簡単に排除する

猫に厳しい地域は猫にだけ厳しいのではなく、猫問題と向き合うよりずっと前に、排除のシステムを定着させていているはずだ。それが当たり前だと思い生活していると、“排除が楽で効果的な対応である”、という理論が無意識のうちに個人の中にもコミュニティの中にも根付いていく。すると、次に全く別の場面に遭遇した時、無意識にその排除の理論やシステムが動き出す。

個人でいえば、自分（たち）にとって都合の悪い人やモノ、合わない人と遭遇した時、排除という解決法を用いてきたのだろう。「どうしていじめが起こるのかわからない。今時の子どもは…」という話は何度も聞いたことがあるが、分からないと言っている人たちが長い時間をかけて作り上げ、様々なところに配置してしまった排除の理論を、若い世代もきちんと学習し、早いうちから発揮してしまっているだけなんじゃないかと思う。

言葉のブーメラン、哲学のブーメラン

排除の論を推奨しない理由として、“言葉のブーメラン”がある。

意味は「他人に対する指摘（主に批判）がそっくりそのまま自分にもあてはまってしまうこと。つまり、お前がそれ言うなよっ！」というツッコミである（“言葉のブーメラン”や“ブーメラン発言”は、若い世代で作られたのか、2ちゃんねるや Twitter といったネット界で生まれたのか発祥元は不明だが、初めて聞いたときは『うまいこと言うな〜』と思った）。

哲学のブーメラン

他者（猫）を簡単に排除すればいいという哲学は、自分にも返ってくる。おそらく、「自分自身も弱者となれば、排除されてしかたがない」という無意識の哲学にも支配されている。だから自分が排除されてしまうのではないかという不安感に押しつぶされてしまいそうになるため、他人に強く当たり、自分の強さ、存在意義を誇示してしまうのではないかと思う。それって、とても生きづらいのではないだろうか。周囲の人も、自分自身も傷つけてしまう哲学だ。

なぜ、そう思うのか、自分の経験を思い返してみたい。

過去のできごと

私は、小学校からバスケットを習い始めた。できる事が増えていく感覚の面白さに、中学校の頃にはドハマリしていた。ストイックに練習に打ち込み、試合で活躍できると、自分の居場所はここにあると感じ、さらに練習に打ち込んだ。そして、自己表現をしたい欲求は、「実力のあるメンバーだけで試合に臨みたい。やる気のないやつはチームにいない。」と考える方向へ向かっていった。自分から見て努力していないように見えるチームメイトを責めた。排除を肯定する思考になっていた。でもそれを「自分にも人にも厳しい自分」と肯定的に認識することで自惚れ、自分のアイデンティティを保っていた。そして、試合で自分が上手くプレーできずに負けるたび、「役にたてなければ、自分の居場所はどこにもなくなってしまう」と怯えて布団かぶって泣いていた。排除論の辛い副作用だったと思う。

そんな私の哲学が大きく変わる出来事があった。

そのきっかけは大きく2つある。

きっかけその1：新しいコーチ

部活に新しいコーチが来た。そのコーチは私の意思には反して「全員バスケットをする」と言うのである「やる気のない選手はいない！」と考えていた私は猛反発。「全員バスケット」の理念のもと、「いない選手なんていない！」そう声を張り上げるコーチの言葉が、今まで受けていた道徳の授業のように、着地することなく心の中を通り過ぎて行った。

後に、このコーチとの出会いが自分の排他的な哲学を崩し、新しい自分哲学を作るキープointとなった。

きっかけその2：猫の保護

話は少し変わるが、私が育った家族はよく動物を拾う家族だった。猫が一番多かったが、犬やハト、人、亀、様々な生き物が一時的に我が家に来た。その血は私にも濃く流れており（というより、拾ってきて怒られない空気感が家の中にあった）、病気でガリガリの子猫や、交通事故にあって倒れている猫など、拾ってきては治療して新しい飼い主さんを探し、譲渡していた。とくに勉強したわけでもないのに、運よく保護した子猫は元気に回復し素敵な家族にもらわれていくことが続いていた。今思えば、うまく行き過ぎていた。

ある時、そんな私の未熟さ故に死んでしまった子猫がいた。取り返しのつかない事態に、申し訳なくて悲しくて苦しくてただただ、泣いて後悔することしかできず、でも泣いていては、自分が悪いのに、悲劇のヒロインのふりをしているようで、それが嫌で、感情を收拾できなかった。その時期に宗教の授業だったか、なんだったか、人は2回死ぬ（1回は体の死で、2回目は自分のことを覚えている人がいなくなった時）と聞いた（都合のいい解釈をしていて本当はそんな話しじゃなかったかもしれない）。その子猫のことを思い出す度に心臓が潰れそうになる痛みは、自分の中でまだあの子が生きている証なんだ、この痛みがなくなることの方が怖いことなんだと理解しなおした。それなら、数か月しか生きることのできなかったあの子猫が、私に教えてくれた沢山のことを今後出会うであろう猫たちに役立てることで、あの子が生きた意味を濃く残していくことができるのではないだろうかと考えた。

それからは、真剣に保護活動しようとして獣医さんにあれこれ教えてもらい、真剣に保護した命と向き合っていた。それまでは、たまたま出会った負傷猫を拾ってただけで保護活動を能動的にしているつもりはなかった。

生後1か月ほどの手のひらサイズの子猫なのに、猫風邪にかかり、両目は目やにで塞がり、鼻水が固まってしまい息もままらない状態の子猫に、「なんとか生きてほしい。元気になって」と何度も何度も声をかけ、目やにや、鼻水をこまめに拭いた。口に入れた餌を呑み込んでくれた時、自分から進んでガツガツ食べてくれた時、回復して元気に遊んでいる姿を見た時、言葉では言い表せないくらい嬉しかったことを覚えている。嬉しくて嬉しくて「ああ、ただ元気に生きてくれているだけで、こんなにも素晴らしいことなんだ。人に元気を与えてくれる存在なんだ。」そう思った。

“命の大切さ”という言葉が初めて自分の心に着地した。

変化

「生きているだけで、奇跡みたいにすごいことなんだ。」そう猫に気づかされてから、学校に行くと、友達や先輩、後輩が違って見え、自然と関わり方が変わっていった。それと同時に、部活動にも変化が現れていた。「全員バスケ」の理念のもと、試合もなるべくベンチメンバー全員が出場するようになったが、練習は厳しくなっていた。だが、今まで以上に皆が必死になって取り組んでいた。今思えば、当たり前なのかもしれないが、試合に出たり、必要とされることによって、皆バスケが楽しくなっていた。“楽しい”気持ちは純粋に頑張

るモチベーションになる。そんなことに気づいた時には、私自身も部活が楽しくて楽しくてしかたなかった。

全員バスケといっても、「勝敗は気にせず、全員均等な時間試合に出ましょう」というわけではなく、コーチは試合に勝つことに全力を尽くしていた（心のうちでは、様々な意図や思いがあったかもしれないが、少なくとも生徒であった私たちの瞳には、本気で勝たせようとしてくれていると映っていた）。だから、試合の出場時間は均等ではないし、試合によっては出場時間がなかった選手がいることもある。

格上のチームとの試合前に、コーチはこう言った。

「いいか、あの相手に、40 分間互角に戦ってこいとは言わない。10 分互角にやってくるのだって無理だ。だから、1 分だけでいい。1 分だけ必死になって、自分のマークを抑えるか、一泡吹かせてこい。それならできるだろう。それを全員でつないでいくんだ。そしたら勝てる！」

暑苦しいと思うだろうか(笑)。ばかばかしいと思うだろうか。おそらく試合会場にいた私たちのチーム以外の誰もが、私たちの負けを確信している試合でも、私たちが勝てると思い込むには充分すぎる言葉だった。だいたい一回戦負けか、よくて二回戦負けが常だったチームが、コーチが来て 2 年目には県大会に出られるようになった。カトリック大会で優勝できるようになった。

そして私は、「使えない選手がいたんじゃない。使えないシステムがあっただけなんだ。」そのシステムを作っていたのが自分自身だったんだと気づいた。

心からチームメイト全員がこのチームに必要なんだと思えた。いらない選手はいない。そう心から思えた時、その理論はブーメランとなり私自身にかえってきた。自分も技術の上手い下手とか小手先のことでなくてチームにいていい、必要な存在なんだ、と思えたら、とても心が軽くなった。新しく築かれた哲学の良い副作用だった。

まとめ

言葉や哲学はブーメランであり、コミュニティシステムは“自分だけ”を特別扱いはしてくれない。排除のコミュニティシステムの中では、常に自分自身も排除対象となりえる緊張感の中で過ごすしかないのだ。

猫に教えてもらった気づきは、バスケットの経験を通してより具体的に理解された。

猫に関しても殺処分されるべき不要な猫がいるはけではなく、生かし、活かすことができない人間の社会システムがあるのだと考えるようになった。

学校の檻にウサギを閉じ込めて、一方的に触れ合ったり、一週間に 1 回程度回ってくる掃

除当番で、命に対する責任感や共感の心を育てようとしなくても（おそらく育たない）、大事なことは身近な猫が教えてくれるかもしれない。身近な猫に接する大人の姿が、子どもたちに命に対する責任を教えてあげることができるのではないだろうか。

大人も含めた社会全体にちらばっている小さなシステムや、個人が無意識のうちに作り上げてしまった排除的な哲学を、地道にひとつずつ変えていくことがいつか大きな変化を生むのではないかと思う。そういった意味でも、地域に住むノラ猫の問題に、地域が真剣に向き合い取り組むことに大きな意義があると思う。

空気の変化

動物の殺処分問題を私が知った頃は、今から12年ほど前で中学生の頃だった。当時年間猫の殺処分は、約23万9千頭（H16）にのぼった。初めて知った時大きなショックを受けたことを覚えている。色んな人に話したが、意外なほどにも大人の対応はドライだった。「しかたがない」、「やむをえない」、「あまり言いすぎると変な人だと思われるよ」、そんな空気が漂っていた。とても気持ち悪い空気だと思った（幸い私の両親はあまり空気を読まないたちだったので自由に行動させてくれた）。

しかし、ここ最近、テレビでも「犬や猫の殺処分問題」が取り上げられるようになり、芸能人たちも殺処分問題に関心があることを表明しても大丈夫な空気感になってきた。気持ち悪い空気感の何十年も前から、地道にTNR（飼い主のいない猫を一旦捕獲し、不妊去勢手術を施したうえで、元いた場所に戻す活動のこと）や地域猫活動を続けてきたボランティアさんや、一部の行政の足跡が、「殺処分よりも、TNRや地域猫活動の方がいいかもしれない」というように世論を変えつつあるんじゃないかと思う。

注意点

ただ、注意点として排除しないシステム論的な介入にはそれなりの技術がいるということだ。バスケもただ皆で仲良くやりましょうと、うわべを繕ったってうまくはいかない。年齢やチームの状況、目指すところを見極めて、適切に介入したコーチングの技術があったからこそ、チームが良い方向にまとまったのである。また、この経験は、あくまで私の個人的で主観的な内容であり、チームメイトであっても、一人一人コーチの見え方や経験した気持ちは違うだろう。TNRや地域猫活動もうまくいくにはそれなりの理由がある。だから、なんとなくTNRっぽいこと、地域猫活動っぽいことをやって、うまくいなくて、「TNRや地域猫はダメだ」と簡単に結論を出してしまわないでほしいと思う。どの地域にもあてはまるマニュアルがあるわけでもない。

余談

私は保護した猫たちから多くのことを教わった経験を「リヒーリング効果」と造語で呼んでいる。“癒そうとすることで、跳ね返って自分の方が癒されること”という意味で、癒しと

いう意味の“ヒーリング”に戻るという意味の“リ”をつけただけの英語が苦手な人が考えた感丸出しの呼び方をしていた(笑)。先日、対人援助学マガジンの千葉さんの連載を読んで、こういったことは社会福祉の場面では、「ヘルパーセラピーの原則」と言われていることを知った。同じなのか、同じにしてはいけないものなのか、今度千葉さんに聞いてみようと思う。個人的にはとても近いものだと思っている。

実体験をもとに考えると、この心理的効果はとても大きい。

■ おわり

小池英梨子

立命館大学院応用人間科学研究科対人援助額領域 2015 年修了

猫を切り口に、共生と共存社会のリアリティについて研究

公益財団法人どうぶつ基金に2年間勤務し、犬猫の殺処分ゼロを目指す取り組みに従事。

現在は、「ねこから目線。」としてフリーで活動中。



ⁱ 統計資料 「犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況」(環境省) 2016.11.14 アクセス
http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html